

# 『木琴デイズ』

平岡養一「天衣無縫の音楽人生」

「国民的音楽家」と

日米両国で呼ばれた、

伝説の木琴奏者の

人生を同業の著者が辿る

評者  
後藤正治  
ノンフィクション作家

著者  
通崎睦美

講談社 / 1995年

事ぶりである。加えて、古いレコードを聴き込み、平岡の時代ごとの技量と作風の変容をたどるなど、これは演奏家にしてはじめて成し得ることである。

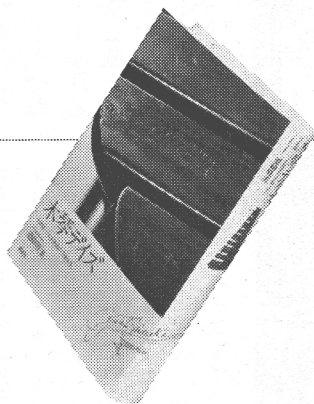
平岡養一とは何者だったのか——という問いの解は戦中期の生き方に示されて

を披露して乗客を楽しませた。

戦時下、平岡は「音楽挺身隊」の一員となり、戦地にも足を運んでいる。別段、国粹主義に衣替えしたのではない。「とにかく、平岡は常に木琴を弾いていたかった、そして誰かに聴かせていたかった」のだ。いかにも楽しげに踊るように鍵盤を叩く。時、所、環境を超えて演奏へと向かう「一念」が平岡の生涯を貫いてあるものだった。

読了し、「残響のない清々しい木琴の音色」を聴きたく思い、著者の木琴リサイタルに足を運んだ。平岡が使い込んだ愛器を前に、軽やかに、弾むように奏でる姿にふと、往時の先達の姿が影絵のように浮かんできた。

ごとうまさる／46年生まれ。95年「リターンマッチ」で大宅壮一ノンフィクション賞、11年「清冽」で桑原武夫学芸賞受賞



岡の愛器を譲り受けるといふ縁が続いた。

時代はマリ

ンバ全盛となり、木琴は忘れられた響きともなるが、著者は明るい澄んだ音色に魅了される。見えざる糸に導かれる

ように、かつて「チャイミングなおじいちゃん」と映った先達の、起伏ある人生を追っていくのである。

平岡のSPレコードや演奏プログラムを渉猟し、ニューヨーク・タイムズに残る平岡の演奏評も探し出している。手間隙をかけた仕

本書は、戦前・戦中・戦後にまたがり、日米の音楽界に大きな足跡を刻んだ木琴奏者・平岡養一の評伝である。慶大を卒業して渡米、毎朝のラジオのレギュラー番組をもち、全米の少女少女は「ヒラオカの木琴」で目を覚ますともいわれた。日米開戦で帰国するが、戦後も両国を往来しつつ演奏を続け、「国民的音楽家」とも呼ばれた。

本書の際立った特徴は、音楽家の手で綴られた音楽ノンフィクションであることだ。著者十歳、平岡七十七歳の日、演奏会で二人の出会いがあった。さらに後年、マリンバ奏者となった著者は木琴協奏曲を演奏し、平

